

③問題行動に対する姿勢と現実目標

高校生の現実目標と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動を「とめるか」（「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準）との関連を検討するため、生活感情の構造尺度のうち『現実目標の領域尺度得点』を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-8-3に示す。

問題行動を「とめるか」の主効果による有意差があったのは、飲酒、自転車・バイク盗み、軽度の援助交際、性行為の強要の4種類の問題行動であった。これらの問題行動を「とめる」と思っている者の方が「とめない」と思っている者よりも、現実目標の領域尺度得点が高かった。従って、友だちが飲酒、自転車・バイク盗み、軽度の援助交際、性行為の強要などの問題行動をしているのを見た時に「とめる」と思っている者の方が、「とめない」と思っている者よりも、現実的な目標があると感じていることが示された。

表4-8-3 問題行動に対する姿勢と現実目標

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
飲酒	3.26(0.73)	3.43(0.76)	3.69(0.62)	3.23(0.81)	3.28(1.02)	3.37(0.81)	F(1,571)=4.05*(とめるか)
自転車盗	3.13(0.84)	3.34(0.67)	3.39(0.69)	2.82(1.00)	3.02(0.82)	3.33(0.81)	F(1,570)=7.43**(とめるか)
軽援交	3.13(0.81)	3.26(0.67)	3.47(0.68)	3.01(0.92)	3.31(0.86)	3.30(0.81)	F(2,564)=6.90**(とめるか)
性強要	3.01(0.77)	3.28(0.66)	3.39(0.74)	2.94(0.84)	3.08(0.74)	3.32(0.84)	F(1,562)=5.28**(とめるか)

*p<0.05, **p<0.01

第9項 問題行動と理想目標との関連

①問題行動の実体験の有無と理想目標

高校生の理想目標と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、生活感情の構造尺度のうち『理想目標の領域尺度得点』を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-9-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差があった問題行動は、盗みと薬物・ドラッグであった。飲酒と薬物・ドラッグの経験がない者の方が、ある者よりも理想目標の領域尺度得点が高かった。従って、盗みや薬物・ドラッグの経験がない者の方が、ある者よりも自分の将来に対する理想目標をもっていると感じていることが示された。

表4-9-1 問題行動の実体験の有無と理想目標

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
盗み	3.38(0.73)	3.30(0.65)	3.45(0.81)	3.15(0.80)	F(1,578)=4.55*(体験)
薬物	3.38(0.72)	2.97(0.37)	3.43(0.81)	2.42(1.01)	F(1,579)=7.95**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と理想目標

高校生の理想目標と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、生活感情の構造尺度のうち『理想目標の領域尺度得点』を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-9-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、自転車窃盗、盗み、暴行、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要の6種類の問題行動であった。これらの問題行動を「いけない」と思っている者の方が「いい」と思っている者よりも理想目標の領域尺度得点が高かった。従って、これらの問題行動がいけないことであると思っている者の方が、自分の将来に対する理想や目標を持っていると感じていることが示された。

なお、飲酒については交互作用がみられた。

表4-9-2 問題行動に対する意識と理想目標

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでもない	いけない	いい	どちらでもない	いけない	
飲酒	3.26(0.72)	3.64(0.75)	3.53(0.61)	3.45(0.83)	3.32(0.83)	3.40(0.75)	F(2,578)=4.66*(交互作用)
自転車窃盗	3.15(0.65)	3.13(0.65)	3.40(0.72)	3.44(0.95)	2.89(1.05)	3.43(0.80)	F(2,577)=3.58*(いけなさ)
盗み	3.30(0.65)	3.08(0.47)	3.38(0.73)	3.21(0.69)	2.78(0.94)	3.44(0.80)	F(2,577)=4.41*(いけなさ)
暴行	3.09(0.45)	3.30(0.64)	3.43(0.76)	3.50(0.62)	3.03(0.90)	3.44(0.81)	F(2,574)=3.12*(いけなさ)
軽援交	3.17(0.68)	3.41(0.64)	3.46(0.75)	3.28(0.93)	3.35(0.71)	3.48(0.80)	F(2,574)=4.91**(いけなさ)
重援交	3.06(0.63)	3.27(0.65)	3.49(0.72)	3.46(1.06)	3.30(0.77)	3.43(0.81)	F(2,572)=3.08*(いけなさ)
性強要	3.04(0.45)	2.96(0.50)	3.44(0.74)	3.23(0.87)	3.15(0.85)	3.45(0.80)	F(2,572)=6.62**(いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と理想目標

高校生の理想目標と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動を「とめるか」（「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準）との関連を検討するため、生活感情の構造尺度のうち『理想目標の領域尺度得点』を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-9-3に示す。

問題行動を「とめるか」の主効果による有意差があったのは、自転車窃盗、盗み、暴行、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要の6種類の問題行動であった。これらの問題行動を「とめる」と思っている者の方が、「とめない」と思っている者よりも理想目標の領域尺度得点が高かった。

従って、友だちが自転車窃盗、盗み、暴行、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要をしているのを見た時に「とめる」と思っている者の方が、「とめない」と思っている者よりも、自分の将来への理想目標があると感じていることが示された。

表4-9-3 問題行動に対する姿勢と理想目標

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
自転車盗	3.22(0.70)	3.22(0.52)	3.46(0.75)	3.10(0.97)	2.98(0.86)	3.48(0.78)	F(2,577)=9.63**(とめるか)
盗み	3.04(0.60)	3.38(0.69)	3.44(0.73)	2.97(1.14)	3.29(0.89)	3.44(0.79)	F(2,576)=5.77**(とめるか)
暴行	3.23(0.64)	3.18(0.56)	3.44(0.75)	3.40(0.92)	3.10(0.92)	3.45(0.80)	F(2,570)=5.03**(とめるか)
軽援交	3.16(0.69)	3.24(0.69)	3.56(0.69)	3.16(0.86)	3.31(0.82)	3.50(0.79)	F(2,571)=11.79**(とめるか)
重援交	3.10(0.66)	3.21(0.61)	3.53(0.71)	3.10(1.07)	3.19(0.78)	3.47(0.80)	F(2,570)=9.83**(とめるか)
性強要	3.09(0.61)	3.15(0.66)	3.47(0.73)	3.08(0.89)	3.25(0.82)	3.47(0.80)	F(2,569)=8.17**(とめるか)

*p<0.05, **p<0.01

第10項 問題行動と自己存在感のなさとの関連

①問題行動の実体験の有無と自己存在感のなさ

高校生の自己存在感のなさ（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、『自己存在感のなさ尺度得点』を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-10-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、盗み、恐喝、および薬物・ドラッグであった。盗みや恐喝、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも自己存在感のなさ尺度得点が高かった。従って、盗みや恐喝、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも自分自身の存在感のなさを感じていることが示された。

表4-10-1 問題行動の実体験の有無と自己存在感のなさ

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
盗み	2.31(.86)	2.51(0.90)	2.28(0.88)	2.62(0.88)	F(1,576)=7.14**(体験)
恐喝	2.31(0.86)	3.01(0.81)	2.31(0.88)	3.25(1.30)	F(1,577)=6.24*(体験)
薬物	2.32(0.86)	3.20(0.55)	2.30(0.87)	3.67(1.64)	F(1,577)=15.56**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自己存在感のなさ

高校生の自己存在感のなさ（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、『自己存在感のなさ尺度得点』を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-10-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、無免許運転、自転車窃盗、盗み、恐喝、薬物・ドラッグ、重度の援助交際、性行為の強要の7種類の問題行動であった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が「いけない」と思っている者よりも自己存在感のなさ尺度得点が高かった。従って、これらの問題行動をいけないとは思っていない者の方が、自分自身の存在感のなさを感じていることが示された。

表4-10-2 問題行動に対する意識と自己存在感のなさ

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでも	いけない	いい	どちらでも	いけない	
無免許	2.49(0.95)	2.79(0.64)	2.27(0.86)	2.77(0.99)	2.63(0.97)	2.25(0.86)	F(2,574)=9.08**(いけなさ)
自転車盗	2.77(1.00)	2.64(0.69)	2.30(0.86)	2.20(1.31)	2.98(1.10)	2.29(0.87)	F(2,574)=4.56*(いけなさ)
盗み	2.60(0.89)	2.74(0.61)	2.31(0.87)	1.94(1.00)	3.74(0.85)	2.27(0.85)	F(2,575)=13.50**(いけなさ)
恐喝	2.67(0.74)	2.95(0.68)	2.30(0.87)	2.50(1.15)	3.58(0.95)	2.30(0.87)	F(2,574)=7.96**(いけなさ)
薬物	2.68(0.77)	2.96(0.42)	2.27(0.88)	2.67(1.32)	3.00(1.00)	2.29(0.86)	F(2,575)=8.99**(いけなさ)
重援交	2.55(0.84)	2.52(0.76)	2.25(0.89)	2.36(1.22)	2.57(0.94)	2.28(0.85)	F(2,570)=4.38*(いけなさ)
性強要	2.68(0.94)	2.71(0.72)	2.30(0.86)	2.28(1.09)	2.64(0.84)	2.28(0.88)	F(2,570)=4.40*(いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と自己存在感のなさ

高校生の自己存在感のなさとは性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動を「とめるか」（「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準）との関連を検討するため、『自己存在感のなさ尺度得点』を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-10-3に示す。

問題行動を「とめるか」の主効果による有意差があったのは、自転車窃盗、盗み、恐喝、暴行、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要の8種類の問題行動であった。これらの問題行動を「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも自己存在感のなさ尺度得点が高かった。従って、友だちが自転車窃盗、盗み、恐喝、暴行、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要をしているのを見た時に「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも、自分自身の存在感のなさを感じていることが示された。

表4-10-3 問題行動に対する姿勢と自己存在感のなさ

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
自転車盗	2.56(0.90)	2.52(0.73)	2.23(0.87)	2.39(0.86)	2.88(1.02)	2.26(0.86)	F(2,575)=8.51**(とめるか)
盗み	2.63(0.88)	2.46(0.76)	2.28(0.87)	2.79(1.09)	2.80(0.89)	2.27(0.87)	F(2,574)=6.36**(とめるか)
恐喝	2.55(0.81)	2.65(0.71)	2.27(0.89)	2.64(1.21)	2.59(0.98)	2.29(0.87)	F(2,574)=4.01*(とめるか)
暴行	2.67(0.77)	2.56(0.92)	2.23(0.85)	2.93(0.89)	2.69(0.97)	2.26(0.87)	F(2,570)=8.68**(とめるか)
薬物	2.78(0.86)	2.83(0.69)	2.26(0.86)	2.88(1.18)	2.63(0.88)	2.28(0.87)	F(2,574)=9.06**(とめるか)
軽援交	2.53(0.92)	2.42(0.70)	2.21(0.88)	2.53(0.93)	2.38(0.95)	2.26(0.86)	F(2,569)=5.26**(とめるか)
重援交	2.49(0.94)	2.45(0.70)	2.28(0.88)	2.56(1.13)	2.67(0.95)	2.26(0.86)	F(2,568)=4.81**(とめるか)
性強要	2.71(0.83)	2.51(0.76)	2.26(0.88)	3.02(0.90)	2.56(0.83)	2.24(0.88)	F(2,567)=11.68**(とめるか)

第11項 問題行動と自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』との関連

①問題行動の実体験の有無と自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』

高校生の自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-11-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、自転車窃盗および盗みであった。自転車窃盗や盗みの経験がある者の方が、ない者よりも自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点が低かった。従って、自転車窃盗や盗みの経験がある者の方が、ない者よりも、日常生活において自分自身の欲求と現実環境とのかねあいをしながら、自身の能力に応じて活動することができる自我機能が未熟であることが示された。

表4-11-1 問題行動の実体験の有無と『総合・統合機能-支配・有能性』

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
自転車盗	3.19(0.68)	2.92(0.67)	3.23(0.64)	3.07(0.48)	F(1,587)=4.82*(体験)
盗み	3.18(0.70)	3.02(0.60)	3.25(0.64)	3.01(0.47)	F(1,586)=6.90**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』

高校生の自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『総合・統合機能-支配・有能性尺度』得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-11-2に示す。